

献呈の辞

きびしい寒さも少しずつやわらいで春のおとずれを感じる季節となりました。大学にとっては試練の多い時代が続いていますが、今年度より始まった新しい学士課程の教育、神田キャンパスの活用に向けた構想の立案など、専修大学のさらなる躍進に着実な一歩をしるした一年であったと言えます。そして、今年もまた年度の終わりを迎え、退職される先生がたをお送りする時期となりました。

専修大学文学部では、2015年3月末日をもって、日本語学科の永瀬治郎教授、歴史学科の新井勝紘教授のお二人が定年を迎えて退職されます。

永瀬治郎教授は、国際基督教大学を卒業され、東北大学大学院文学研究科に進学して言語地理学の研究を深められました。その後、山梨県立女子大学を経て、1978年に本学文学部に着任され、以来37年の長きにわたって社会言語学の研究・教育に力を注いでこられました。

永瀬先生のご研究は、方言やキャンパス言葉の調査など、現代社会のなかで変化を遂げつつある生きた日本語への興味に支えられているように思われます。言語・コミュニケーションを社会との関わりの中かでとらえる視野の広さは、先生の学問の特徴であるのみならず、各種会議でのご発言などからも垣間見ることができました。長年、国際交流センターの委員を務められ、また大学院文学研究科長として手腕

を發揮されたことも思い出されます。

ここ20年ほどのあいだに、先生が所属される学科の名称は国文学科から日本語日本文学科へ、そこから二学科へと分かれて日本語学科へと変わりました。日本語学科が伝統的な学問を継承しつつ、日本語教育などの新しい分野を充実させて発展を続けてきたことにも、大学における日本語学の研究・教育のあり方についての先生の長期的な展望が大きく反映されていると言えます。

新井勝紘教授は、東京経済大学で日本近代史、特に自由民権運動史を専攻したのち東京都町田市の町田市史編纂室にお勤めになり、町田の歴史を編纂するお仕事をされました。1980年代には、町田市立自由民権資料館を創設するにあたって責任者の大役を果たされ、1990年には国立歴史民俗博物館歴史研究部の助教授に就任されました。その後2001年より本学文学部に教授として着任し、14年にわたって研究・教育に尽力してこられました。

史料を丹念に読み解き分析すると同時に現地調査（フィールドワーク）を重視する新井先生の学問は、近年では学校教科書にも記述されるようになった「千葉卓三郎」の私擬憲法である「五日市憲法草案」の発見に深く関わった学部の子学生時代以来、本学でゼミ生と一緒に行った「軍事郵便」の研究にまで貫かれています。戦争中に兵士から家族へ向けて書かれた手紙を歴史史料として読む——それが学生たちにとってかけがえのない体験であったことは、専修大学文学部日本近現代史ゼミナール編『ケータイ世代が「軍事郵便」を読む』（専修大学出版局、2009年）にみごとに結晶されています。2005年以後、大学キャンパスで催された展示も、大きな反響を呼びました。

専修大学文学部の発展に大きく寄与された両先生に対し、惜別の思
いは尽きませんが、以上、心からの感謝の気持ちとともに献呈の辞と
させていただきます。

2015年3月

専修大学文学部長 廣 瀬 玲 子